濃尾平野における布留式甕について

――門間沼遺跡94Ｃｂ区ＳＤ15出土土器を中心として――

早野浩二

１．はじめに

各地で古墳の築造が開始されるのと相前後して、土器の地域間交流がにわかに活況を呈するようになる頃、濃尾平野においてはＳ字状口縁台付甕形土器（以下、「Ｓ字甕」）を代表的器種の一つとする、きわめて個性的な土器群が形成されていた。

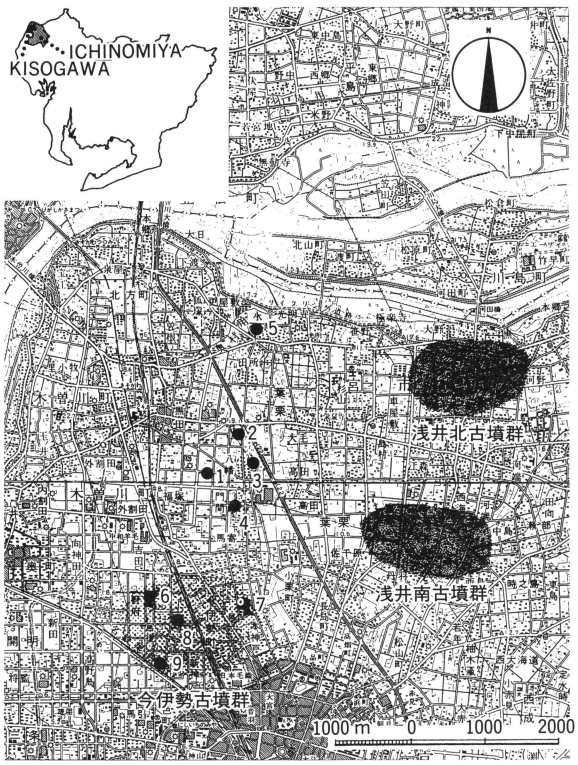
そしてこれらの濃尾平野の土器は、東国各地において濃密に分布していることは言うに及ばず、奈良県桜井市纒向遺跡[1]をはじめとする畿内の諸遺跡でも相当量の出土が報告されており、その背景に大がかりな人々の移動を想定する研究者も多い[2]。逆に濃尾平野には東国や畿内に出自をもつ土器がごくわずかしかみられないことから、こうした土器の動態は濃尾平野からの「一方通行的現象」と評されている[3]。

これまで当埋蔵文化財センターが継続して行なってきた東海北陸自動車道の建設に伴う尾張平野北部での発掘調査では、北道手遺跡、大毛池田遺跡、門間沼遺跡などにおいて古墳時代前期に関係する多くの注目すべき成果が挙げられてきている。特に門間沼遺跡94Ｃｂ区の溝（ＳＤ15）から多量の古式土師器とともに出土した布留式甕は、古墳時代前期における土器の交流を考察するうえで、少なからぬ意義をもつものと考えられる。今回は門間沼遺跡出土の布留式甕とその共伴土器を紹介するとともに、派生する問題について若干の検討を加えることにしたい。

２．門間沼遺跡出土の布留式甕とその共伴土器

(1) 遺跡および遺構の概要[4]

門間沼遺跡は愛知県葉栗郡木曽川町大字門間字沼に所在し、木曽川により形成された標高９ｍ前後の自然堤防上に立地する（第１図）。平成６年度から実施されている発掘調査においては、古墳時代をはじめ弥生時代から中世に至る多くの遺構が確認されている。



第１図　門間沼遺跡周辺古墳時代主要遺跡位置図
１．門間沼遺跡　２．大毛池田遺跡　３．伊富利部神社古墳
４．門間遺跡　５．北道手遺跡　６．西上免遺跡
７．今伊勢車塚古墳　８．でんやま古墳　９．野見神社古墳

布留式甕が出土した94Ｃ区は古墳時代前期の遺構が最も濃密に展開する調査区であり、当該期（古墳時代前期後半）の遺構としては、溝（ＳＤ15）を挟んで北と南に位置する微高地において竪穴住居３棟以上、掘立柱建物等が検出されている。溝は調査区の東端で北に折れ、集落の東端を画していた可能性も考えられている。

⑵　出土土器の概要（第２図）

ＳＤ15出土の土器を主要器種を中心に、以下にその概要を述べることとする。

１は布留式甕。底部を欠損しているもののほぼ全形を知りうる貴重な資料である。体部はやや長胴を呈し、口縁端部は折り返しによってわずかに内傾し、端面は平坦面をなす。体部外面は全面に不定方向のハケを施したのち細かいヨコ方向のハケを施す。内面は下半部に右下から左上へとナナメ方向にヘラケズリを施し、上半部はヨコ方向（右回り）のヘラケズリを施しているが、ヘラケズリは頸部直下までは及ばない。内面底部付近には、型づくりを窺わせる指頭圧痕が顕著に残る。器壁は約４㎜と布留式甕としてはやや厚めである。体部外面のほぼ全面と底部付近内面には煤の付着がみられる。

この布留式甕は器形や調整などの点において平城宮第２次東朝堂院東朝集殿下層溝（ＳＤ6030）出土の甕Ｂ[5]に類似する。畿内の古式土師器編年に対比させるとすれば、奈良県高市郡明日香村上ノ井出遺跡ＳＥ030下層出土の土師器[6]と前後する時期、また寺沢薫氏の編年[7]で言うところの布留２式に相当するものであろう。

２、３は口縁部の中段より上が外方へと広がり、体部との屈曲部には１状の凹線が認められることなど、赤塚次郎氏による分類[8]でＳ字甕Ｃ類の特徴をもつが、体部の最大径が下方へと移行していく傾向がみてとれることから、Ｃ類のなかでもより新しい段階のものである。２は口径10.2㎝を測る小型のＳ字甕で、口縁端部は丸くおさまる。３は口縁端部が肥厚する面をもつ。器壁は約４㎜とやや厚くなっている。

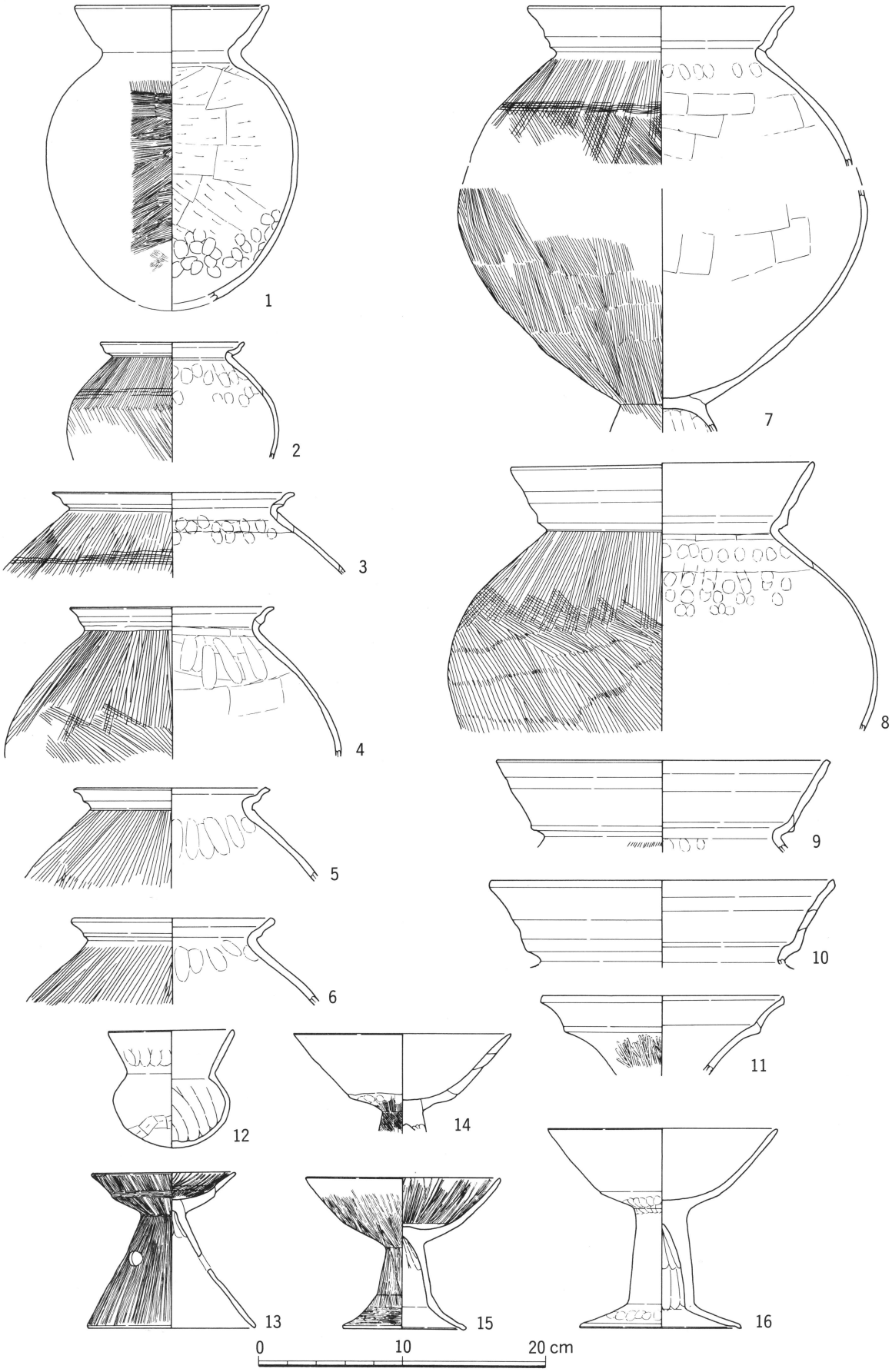
４～６はＳ字甕Ｄ類で、器壁が厚く、体部上半のヨコハケはいずれも欠失し、ナナメハケはかなり粗くなっている。４は口縁部の形状が３に近く、体部との屈曲部の凹線は痕跡となって残ることからＤ類でも古段階のものと考えられる。５の口縁端部は外傾する平坦面をもち、口縁部の厚さは端部の厚さに均一化している。体部との屈曲部の凹線は痕跡的。６も口縁端部は外傾する平坦面をもち、口縁部は明瞭な屈曲をなさない。体部との屈曲部の凹線は消失している。これらはＤ類のなかでもより新しい特徴である。

７～10はＳ字甕の体部にいわゆる「山陰系口縁」が付加されたもので、口径は18.8～24.4㎝を測るいずれも大型の甕である。口縁端部により丸くおさまるもの（７・８）と外傾する平坦面をもつもの（９・10）とに分類できる。体部上半のヨコハケの有無から７より８が後出的と言える。９の口縁部の屈曲部には断面三角形状の突帯を貼りつけていることが観察できるが、もはや痕跡的となっている。

11は二重口縁壺の口縁部の破片。頸部から大きく外反して広がる１次口縁に、外反する２次口縁を乗せるようにして継ぎ足す成形手法をとっている。口唇部は上方につまみあげられ、外側に面を作り出している。外面は細かいタテミガキ調整。

12は小型丸底土器で、口径が体部径をわずかに凌駕する形態である。調整はケズリ・ナデのみによっており、胎土には砂粒を多く含み、細礫も微量だが混入するなど、粗製化が著しい。

13は二段に屈曲しながら外反する器受部に裾広がりで高い脚部がつく形態の小型器台である。脚項部は器受部の底部に突出しており、脚項部の側面に粘土を継ぎ足すようにして器受部を接合したことが観察できる。器受部の外面には細かい放射状のヘラミガキを施したうえ、屈曲部にはさらにヨコミガキを重ねる。内面には暗文風のヘラミガキを施す。脚部外面はタテ方向にヘラケズリを施したのち、匙面状の細かいタテミガキを施す。脚部内面は不定方向のハケメをナデ消し、上部にはシボリ目をとどめる。色調は橙色を呈し、胎土は



第２図　門間沼遺跡94Ｃｂ区ＳＤ15出土土器実測図

番号 整理番号	器種	GR	法量（cm）	胎土・焼成・色調	調整	備考
1 №55	甕	XH 5p	口径 13.6 体部最大径 17.6	胎土‥1㎜前後の砂粒わずかに含む、シャモット含む 焼成‥やや軟質 色調‥橙色	外面：体部不定方向ハケ（5本／1㎝）をナデ消しのちナナメハケ（5本／1㎝） 内面：体部上半ナナメ・ヨコヘラケズリ←底部付近ユビオサエ 口縁部内外面：ヨコナデ	口縁部1／4残存 体部1／3残存 体部外面と底部付近内面に煤付着
2 №149	S字甕	XH 5o	口径 10.2 体部最大径 14.8	胎土‥～1㎜の砂粒含む、金雲母含む 焼成‥やや軟質 色調‥にぶい黄橙色	外面：体部上半ナナメハケ（7本／1㎝）のちヨコハケ（4本／1㎝） 内面：体部上半ユビナデ・オサエ 口縁部内外面：ヨコナデ	口縁部1／4残存 体部1／2残存 体部下半外面に煤付着
3 №121	S字甕	XH 5n	口径 17.0	胎土‥1㎜前後の砂粒含む、金雲母、シャモット含む 焼成‥やや軟質 色調‥にぶい黄橙色	外面：体部上半ナナメハケ（3本／1㎝）のちヨコハケ（4本／1㎝） 内面：体部上半ユビナデ・オサエ 口縁部内外面：ヨコナデ	口縁部1／4残存 体部1／2残存
4 №45	S字甕	XH 5s	口径 14.4 体部最大径 25.6	胎土‥1～2㎜の砂粒含む、かなり砂っぽい 焼成‥やや軟質 色調‥浅黄橙色	外面：体部上半ナナメハケ（4本／1㎝） 内面：頸部直下ヨコ板ナデ、体部上半ヨコ板ナデのちユビナデ 口縁部内外面：ヨコナデ	口縁部・体部1／4残存 体部下半外面に煤付着
5 №132	S字甕	XH 5m	口径 13.6	胎土‥1㎜前後の砂粒多く含む、金雲母含む 焼成‥やや軟質 色調‥浅黄橙色	外面：体部上半ナナメハケ（3本／1㎝） 内面：体部上半ユビナデ 口縁部内外面：ヨコナデ	口縁部1／1残存
6 №151	S字甕	XH 5o	口径 14.2	胎土‥1㎜の砂粒含む 焼成‥良好 色調‥にぶい黄橙色	外面：体部上半ナナメハケ（3本／1㎝） 内面：体部上半ユビナデ・オサエ 口縁部内外面：ヨコナデ	口縁部1／3残存 体部下半外面に煤付着
7 №47	甕	XH 5s	口径 18.8 体部最大径 28.8	胎土‥1㎜前後の砂粒含む 焼成‥良好 色調‥浅黄橙色	外面：体部上半ナナメハケ（5本／1㎝）のちヨコハケ（5本／1㎝）←体部下半ナナメハケ（5本／1㎝）、台部ナナメハケ（5本／1㎝） 内面：体部板ナデのち上半ユビオサエ・ナデ、下半ナデ、台部ユビナデ 口縁部内外面：ヨコナデ	口縁部1／4残存 体部1／2残存 台部1／1残存 体部下半外面に煤付着 山陰系口縁（？）甕
8 №54	甕	XH 5p	口径 21.4 体部最大径 30.0	胎土‥～1㎜の砂粒わずかに含む、金雲母含む 焼成‥良好 色調‥にぶい黄橙色	外面：体部上半ナナメハケ（4本／1㎝）←体部下半ナナメハケ（4本／1㎝） 内面：頸部直下ヨコ板ナデ、体部上半ユビオサエ・ナデ、体部下半ナデ 口縁部内外面：ヨコナデ	口縁部1／1残存 体部1／4残存 体部下半外面に煤付着 山陰系口縁（？）甕
9 №76	甕	XH 5p	口径 23.4	胎土‥1～2㎜の砂粒わずかに含む、金雲母多く含む 焼成‥良好 色調‥にぶい黄橙色	外面：体部上半ナナメハケ（4本／1㎝） 内面：体部上半ユビオサエ・ナデ 口縁部内外面：ヨコナデ	口縁部2／3残存 山陰系口縁（？）甕
10 №143	甕	XH 5s	口径 24.2	胎土‥～1㎜の砂粒含む、金雲母多量に含む 焼成‥良好 色調‥にぶい黄橙色	口縁部内外面：ヨコナデ	口縁部1／4残存 山陰系口縁（？）甕
11 №	二重口縁壺	XH 5m	口径 17.0	胎土‥1～3㎜の細礫わずかに含む、シャモット含む 焼成‥やや軟質 色調‥浅黄橙色	外面：1次口縁タテヘラミガキ（幅1㎜）、2次口縁ヨコナデ 内面：1次口縁ナデ、2次口縁ヨコナデ	口縁部1／1残存
12 №31	小型丸底土器	XH 5s	口径 8.8 器高 8.2 体部最大径 8.1	胎土‥1～3㎜の細礫含む、シャモット含む 焼成‥やや軟質 色調‥浅黄橙色	外面：口縁部ヨコナデのちユビオサエ、体部ナデ、体部下半はヨコヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ユビナデ	ほぼ完形（口縁部一部欠損）
13 № 44	器台	XH 5n	口径 10.0 器高 10.9 脚部径 11.6	胎土‥1～3㎜の細礫含む、シャモット含む 焼成‥良好 色調‥橙色	外面：器受部に放射状ヘラミガキ（幅1㎜）のち器受部の屈折部にヨコヘラミガキ（幅1㎜）、脚部タテヘラケズリのちタテヘラミガキ（幅2㎜） 内面：器受部は放射状ヘラミガキ、脚部は不定方向ハケメをナデ消し→脚部上半シボリ	ほぼ完形（脚裾部1／2欠損） スカシ、中位に三方
14 №34	高杯	XH 4s	口径 15.4	胎土‥～1㎜の砂粒含む 焼成‥良好 色調‥にぶい黄橙色	杯部内外面：ヨコナデ 外面：杯底部タテハケ（13本／1㎝）のちユビオサエ、脚柱状部タテハケ（13本／1㎝） 内面：脚柱状部シボリ	杯部1／2残存 脚部1／1残存 杯部と脚柱状部外面に煤付着
15 №95	高杯	XH 5n	口径 13.6 器高 10.6 脚部径 8.6	胎土‥～1㎜の砂粒多く含む、金雲母含む 焼成‥やや軟質 色調‥浅黄橙色	外面：タテヘラミガキ（幅1㎜）、脚柱状部タテヘラミガキ（幅1㎜）、脚裾部ヨコヘラミガキ（幅1㎜） 内面：杯部タテヘラミガキ（幅1㎜）、脚柱状部シボリ、脚裾部ヨコナデ	ほぼ完形（脚裾部一部欠損）
16 №147	高杯	XH 5n	口径 16.0 器高 14.0 脚部径 11.2	胎土‥1～3㎜の細礫含む、シャモット含む 焼成‥良好 色調‥明黄褐色	杯部、脚裾部内外面：ヨコナデ、杯部と脚部との接合部分はユビオサエ 外面：脚部ナデ 内面：脚柱状部シボリ	ほぼ完形（口縁部一部欠損） 杯部外面に煤付着

第Ⅰ表　出土土器観察表

砂粒を含むものの、比較的精良である。

14～16は高杯で、(14は脚部の大部分が欠損しているが、)いずれも裾部付近で屈折する脚部をもつ形態である。14の杯部と脚部の接合は13の小型器台と同様の手法によっており、脚柱状部外面は細かいハケによる調整である。15の杯部内外面には放射状のヘラミガキを施し、脚柱状部内面の上部にはシボリ目をとどめる。脚裾端部はわずかに下方へ突出する。16は中空の脚柱状部がわずかに膨らみをもち、脚裾端部は下方へ突出している。杯部と脚裾部の内外面はヨコナデ、脚柱状部はナデによる調整である。

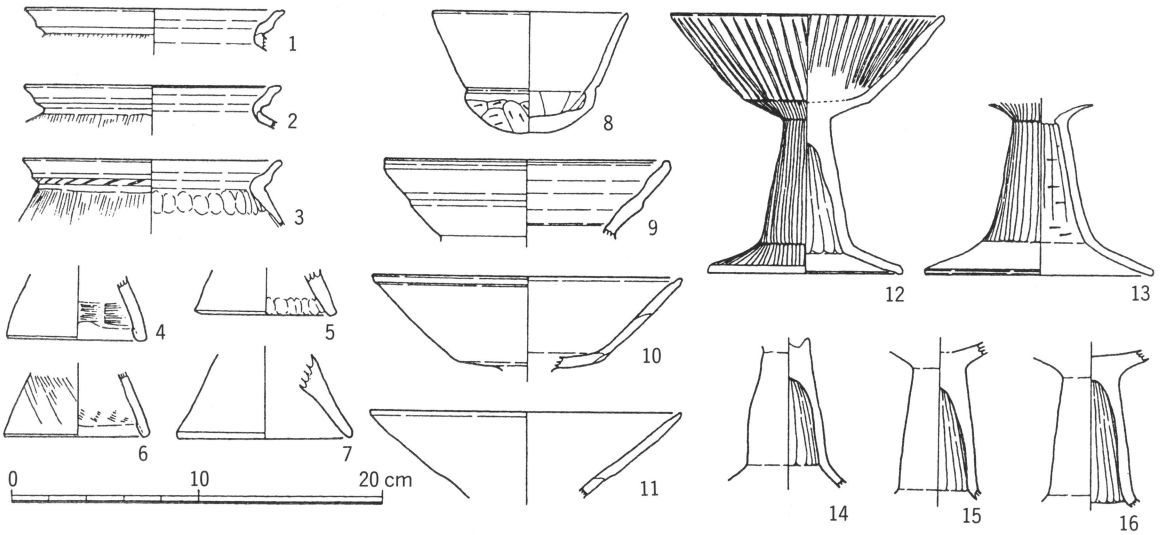
(3) 編年的位置づけと小結

本資料は溝出土資料であるため、ある程度の時間幅を考慮する必要がある。出土土器の整理が途上である今、細部にまで立ち入ることはできないが、今回の主眼は出土土器群の細分ではなく、布留式甕との対比であるので、現段階における可能な範囲での編年的な位置づけを行うこととする。

(2)で述べたとおり、S字甕はC類からD類までのものを含むが、2が小型品であること、3の口縁端部が肥厚した面をもつことからすると、これらはC類でもより新相のものと考えられる（D類段階にまで残存するC類であろうか。）D類は口縁部の形態から判断すると古段階から新段階までのものを含むが、溝からは宇田型甕の出土をみていないようである[9]。

他の特徴としては、小型丸底土器が粗製化していること、高杯は無透孔屈折脚高杯で占められることが挙げらる。ただ小型器台（13）が残存し、その調整手法の点においても小型丸底土器や高杯よりも先行する要素をもつ。

以上の点から、門間沼遺跡94Cb区SD15出土土器群の時間幅はS字甕D類の時間幅に概ね重複すると考えてよく、小型精製土器群が崩壊していくという現象が対応して見られる。つまり、愛知県岩倉市西北出遺跡溝B出土の土師器[10](第3図)により近い時期を求めることができる。この場合、以前にも指摘されているとおり[11]、門間沼遺跡94Cb区SD15出土の小型丸底土器（第2図12）より形態的に明らかに先行する西北出遺跡溝B出土の扁平な体部に大きく外反する口縁部をもつ小型丸底土器（第3図8）の扱いが問題となる。これを「様式移行期の様相」として残存したもの[12]と捉らえうるかどうか、小型精製土器群の消長を改めて整理すべきであるが、資料が不足気味の現時



第3図　西北出遺跡溝B出土土器（註10服部文献より転載）

点においては、西北出遺跡の小型丸底土器、門間沼遺跡の小型器台（第２図13）のいずれも共伴を疑問視する余地ものこしておきたい。

最後に、畿内の古式土師器との併行関係について述べておきたい。これまで該期の共伴資料は不足しがちであったが、門間沼遺跡94Ｃｂ区ＳＤ15出土の布留式甕を寺沢氏の編年で布留２式としてよいなら、布留２式が濃尾平野におけるＳ字甕Ｄ類段階と年代的に接点をもつことになる。このことは、平城宮第二次朝堂院東朝集殿下層ＳＤ6030からＳ次甕Ｃ類（新）が出土している[13]ことなど、他の共伴資料からも肯首しうる。

３．濃尾平野における布留式甕

濃尾平野において布留式甕は現在のところ７遺跡で11個体が確認されている（第４・５図、第３表)。これらを共伴資料を参考にしながら大雑把に布留１式と布留２式に分けて並べた（後述）ものが第４図である。前者は小型精製土器群の盛行、後者はその崩壊という現象が重要な指標の一つとなる。他に布留式甕の影響を無視することはできないものの、形態や技法という点において布留式甕からは大きく逸脱している甕も若干見受けられる（第４図12～14など)。これらの甕については、出自や経路を抽出することが困難であるので、検討の対象からは除外しておく。

(1) 大毛池田遺跡の布留式甕

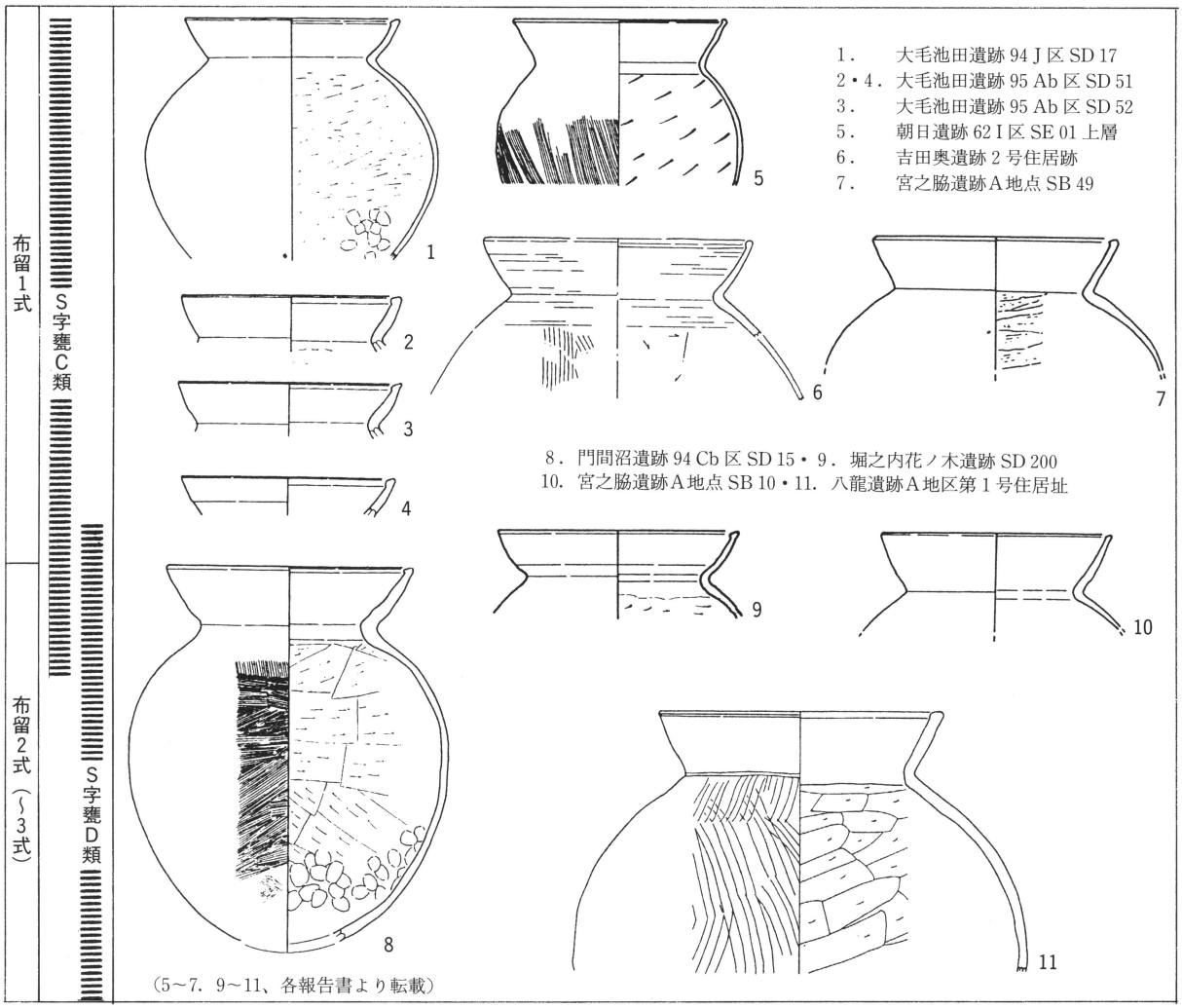
門間沼遺跡に接し、同じく東海北陸自動車道の建設に伴い、発掘調査が継続して実施されている愛知県一宮市大毛池田遺跡においても布留式甕が数点出土しているので、以下に紹介しておく（第４図・１～４)。いずれも、古墳時代前期から中期にかけての土師器が出土した包含層に関係した資料であるため、共伴遺物による細かな時期の特定については触れることができない。

１は口径11.9cmを測る小型の甕で、大きく張る球形の体部を呈する。口縁部は内弯気味に外傾し、端部は内面に肥厚する。体部内面には入念なヘラケズリを施し、器壁を極限にまで薄く仕上げている。体部外面は不明瞭であるが、ハケをナデ消して調整しているようである。

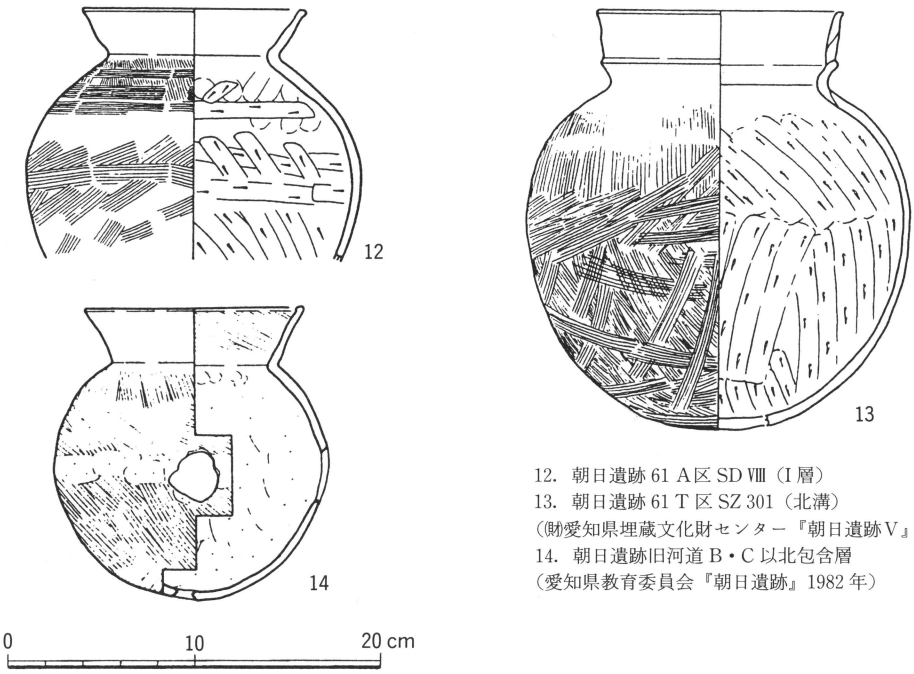
２～４は布留式甕の口縁部の破片と考えられる。いずれも口縁部は強くヨコナデが施されるため、口縁部の中位が最も厚くなっている。２、３の口縁端部は内面に肥厚し、上端に平坦面をもつ。４の口縁端部は内外に肥厚する。２の体部内面にはヨコ方向のヘラケズリが観察できる。１と３は色調が類似しており、同一個体の可能性を完全に否定できるものではないことを付け加えておく。口縁部のみの資料であるため細かな時期については明確にしえない。

番号	調査区・遺構	ＧＲ	法量（cm）	胎土・焼成・色調	調整	備考
第３図 1	94Ｊ・ＳＤ17	ⅡＥ 11ｓ	口径 11.9 体部最大径 16.4	胎土‥１～５㎜の細礫含む、シャモット含む 焼成‥良好 色調‥褐灰色	外面：不定方向ハケをナデ消し？ 内面：体部上半ナナメヘラケズリ←底部付近ユビオサエ 口縁部内外面：ヨコナデ	口縁部１／１残存 体部１／２残存 口縁部外面と体部中位より下に煤付着
第３図 2	95Ａｂ・ＳＤ51	ⅣＥ 12ｃ	口径 12.2	胎土‥～１㎜の砂粒含む 焼成‥良好 色調‥灰白色	口縁部内外面：ヨコナデ 内面：体部ヨコヘラケズリ？	口縁部１／８残存 口縁部外面に煤付着
第３図 3	95Ａｂ・ＳＤ51	ⅣＥ 12ｃ	口径 11.8	胎土‥～１㎜の砂粒含む 焼成‥良好 色調‥にぶい黄橙色	口縁部内外面：ヨコナデ	口縁部約１／10残存
第３図 4	95Ａｂ・ＳＤ52	ⅣＥ 12ａ	口径 13.2	胎土‥～１㎜の砂粒含む 焼成‥良好 色調‥灰白色	口縁部内外面：ヨコナデ	口縁部１／８残存

第２表　大毛池田遺跡出土布留式甕観察表



（参考）



12．朝日遺跡 61 A 区 SD Ⅷ（I 層）
13．朝日遺跡 61 T 区 SZ 301（北溝）
（㈶愛知県埋蔵文化財センター『朝日遺跡Ⅴ』1994 年）
14．朝日遺跡旧河道 B・C 以北包含層
（愛知県教育委員会『朝日遺跡』1982 年）

第 4 図　濃尾平野における布留式甕

(2) 布留式甕の流入時期

濃尾平野において確認されている布留式甕について共伴資料を参考にしながら、その流入時期を明らかにしておきたい。

5は朝日遺跡62Ⅰ区ＳＥ01上層出土の布留式甕[14]で、体部内面のヘラケズリにより、器壁は非常に薄くなっている。Ｓ字甕Ｃ類（新）、杯部が浅く、口径と杯底部径の比が大きい高杯、扁平な体部を呈し口縁部に棒状浮文を付した二重口縁壺[15]などが共伴している。

6は吉田奥遺跡２号住居跡出土の布留式甕[16]で、体部外面には煤が付着する。覆土下層からの出土であるが、床面出土の扁平な体部に大きく外反する口縁部をもつ小型丸底土器と近い時期を想定できようか。

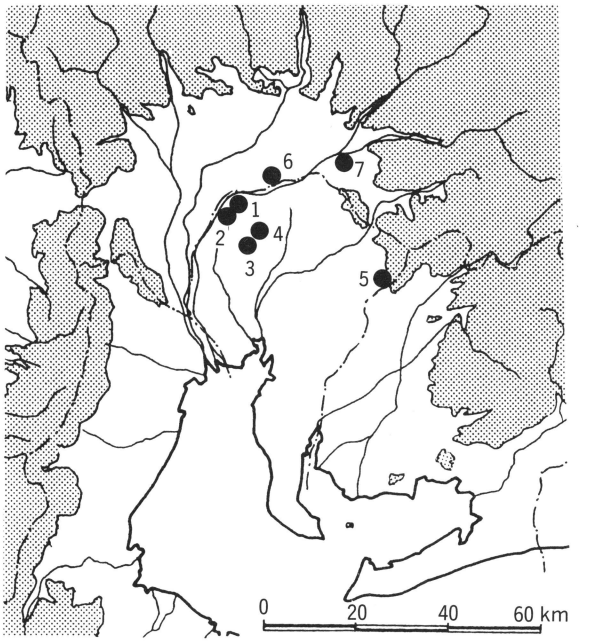
7は宮之脇遺跡Ａ地点ＳＢ69出土の布留式甕[17]で、内面はヘラケズリにより器壁を薄く仕上げている。朝日遺跡62Ⅰ区ＳＥ01上層出土の二重口縁壺に形態が類似した壺や小型器台が共伴する。

8は堀之内花ノ木遺跡ＳＤ200[18]出土。Ｓ字甕Ｄ類（古）、いわゆる「山陰系口縁」甕、柳ケ坪型壺、小型器台、無透孔屈折脚高杯が共伴する。

9は宮之脇遺跡Ａ地点ＳＢ10[19]出土。口径が体部径をわずかに凌駕する小型丸底土器、無透孔屈折脚高杯などが共伴する。無透孔屈折脚高杯はタテミガキを施したものにほぼ占められるようである。

11は八龍遺跡Ａ地区第１号住居址出土の布留式甕[20]であるが、若干の変形が認められる。共伴する小型丸底土器は調整手法の省略が目に見えて顕著であり、高杯は無透孔屈折脚高杯で占められる。

共伴資料による裏付けから、濃尾平野においてはＳ字甕Ｃ類（新）段階からＤ類段階にかけて、ごくわずかずつ（一遺跡につき１点から数点）ではあるものの、布留式甕の流入を確認できる。このことはとりもなおさず、Ｓ字甕Ｃ類段階に顕在化する畿内の土器様式の影響（例えば、小型精製土器群などの新器種の登場）に連動した動きとすることができる。



第５図　布留式甕出土遺跡分布図

1	門間沼遺跡	愛知県葉栗郡木曽川町大字門間字沼
2	大毛池田遺跡	愛知県一宮市大字大毛字池田
3	堀ノ内花之木遺跡	愛知県稲沢市堀ノ内町
4	朝日遺跡	愛知県西春日井郡清洲町大字朝日
5	吉田奥遺跡	愛知県瀬戸市吉野町
6	八龍遺跡	岐阜県各務原市鵜沼小伊木町
7	宮之脇遺跡	岐阜県可児市大字川合字宮之脇

第３表　布留式甕出土遺跡地名表

(3) 布留式甕の分布

濃尾平野における布留式甕の出土遺跡の分布を示したものが第５図である。現在のところ遺跡数、個体数ともに少ない布留式甕について分布の傾向を抽出することは不可能に近く、当然のことながら、今後の調査の進展によって分布が大きく変わることが予想されるが、あえて分布の傾向について二・三の指摘をしておく。

まず、門間沼遺跡、大毛池田遺跡が位置する尾張平野北部での出土が目に付く。これは言うまでもなく、調査面積に比例した結果であり、布留式甕に対してＳ字甕は比較にならない数が出土している事実を看過すべきでない。朝日遺跡についても同様な指摘が可能である。逆に言えば、今後、

濃尾平野低地部において発掘調査が進展するに伴い、非常にごくまれにではあろうが、布留式甕の出土が確認されていくことになろう。

一方で、吉田奥遺跡、宮之脇遺跡、八龍遺跡という濃尾平野の周縁部における布留式甕の分布は（濃尾平野低地部との調査面積の差を考慮すれば）見逃せない。これには、濃尾平野の周縁部では低地部とは異なり、S字甕が必ずしも甕の主体とはならないことが関係していると考えられる。吉田奥遺跡2号住居跡、宮之脇遺跡SB69、八龍遺跡A地区第1号住居址ではS字甕はおろか台付甕の出土を1点も見ずに、平底あるいは丸底の甕で占められることも注意されてよい。

4．まとめ

これまで濃尾平野における布留式甕についての概略を憶測を交えながら述べてきた。布留式甕の出土数は増えつつあるものの、S字甕に比べるとその量たるや微々たるものでしかなく、「S字甕の時代」という評価はより強固なものになることはあっても、揺らぐことはあるまい。この点において、布留式（系）甕に在来の甕が駆逐されていった北陸地方とは明らかに事情が異なる。

しかし、流入した布留式甕の量はともかくとして、ここに紹介した門間沼遺跡、大毛池田遺跡出土の布留式甕に関して言えば、体部内面のヘラケズリなどは故地の製作技法を忠実に踏襲しており、畿内からの直接的な土器製作技術の移入を窺わせる。加えて体部外面全体に煤が付着していることは、完全な丸底球形の布留式甕の使用方法を知る人物が、濃尾平野にも存在したことを示唆している。ある時期を境にして、旧来の「一方通行的現象」が解消に向かったのであろうか[21]。

結論的に言えば、短くともS字甕C類（新）段階からD類段階にかけて、畿内から濃尾平野へという方向に布留式甕の移動というベクトルは作用していたにもかかわらず、濃尾平野では布留式甕が受容され、定着していくことはなかったものと考えられる。それはS字甕を使用するという煮沸方式の強い個性に起因していたものとすることには多言を要さないであろう。濃尾平野においては布留式甕の流入以後もS字甕を規定する重要な要素である器壁の薄さと口縁部の独特な形状を放棄しながらも、なお固執してS字甕D類、さらには宇田型甕までが製作され続けたことにも、そのことはよく表れている。S字甕が甕の主体にならない濃尾平野の周縁部に布留式甕が比較的多く分布するという傾向も、このことと無関係ではあるまい。

ところで、門間沼遺跡SD15出土の土器群のなかには布留式甕とともに、いわゆる「山陰系口縁」がS字甕の体部に付加された甕が比較的多く認められる。「山陰系の共鳴」現象[22]とも言われているものである。さらに、堀ノ内花之木遺跡SD200、宮之脇遺跡A地点SB10でも布留式甕に共伴している。

詳しくは別稿に譲るが、この形式の甕は口縁部中段が拡張した甕も含めて口縁部の形状等により、幾つかに分類することが可能であり、S字甕C類段階からD類古段階まで一定の型式的な変遷が辿れるものと思われる。また「山陰系口縁」が付加されるS字甕は口径20cm前後を測る大型品に限られることから、特別な用途を意図して選択的に製作されたのであろうか。いずれにせよ、奈良県矢部遺跡[23]例をはじめとして、畿内で有段口縁を付加した甕にみられる口縁部の突帯が、濃尾平野にみられるこの形式の甕では消滅していたり、痕跡となって残る程度であることから、この「共鳴（現象）」はいったん畿内を介して濃尾平野にもたらされたものであった可能性が高い。門間沼遺跡をはじめ、布留式甕に共伴する場合が少なくないから、布留式甕の流入と同調した動きとして捉らえられるかもしれない。ある種の独特な甕にこだわり続

けた濃尾平野が布留式甕を受容しないかわりに、この形式の甕のみを主体的に選択して用いた結果だったのであろう。

5．おわりに

これまで濃尾平野から他の地域に向けて移動していく土器がしばしば議論の対象とされてきたのに対し、逆に濃尾平野における他地域に出自をもつ土器が扱われることはあまりなかった。小文を稚拙な形のまま草することになってしまった理由の一つはここにある。

しかし、出土数がきわめて限られる布留式甕のみを対象として議論をすすめるのではなく、他の多くの畿内系の土器をも含めて検討することが必要であることは言うまでもない。ただ、小型丸底土器や屈折脚高杯、二重口縁壺など濃尾平野においてかなりの定着をみる器種とまったく定着をみない、日常生活に直結する甕とではその移動の背景も異なっていたと考えられる。古墳時代開始期における土器の動態が、いかなる政治的要請を反映しているのかを向後明らかにしていくうえでの基礎的作業の一つとして小文を位置付けておきたい。

末尾ながら、今回の小文をなすにあたり、資料の実見に御配慮を賜った青木勘時氏、有益な御助言をいただいた㈶愛知県埋蔵文化財センターの諸氏に記して感謝申し上げます。

註

(1) 石野博信・関川尚芳『纒向』橿原考古学研究所編　奈良県桜井市教育委員会　1976年

(2) 高橋一夫「関東地方における非在地系土器出土の意義」『草加市史研究』第4号　1985年、置田雅昭「大和における古式土師器の実態」『古代文化』26－2　1974年、など。

(3) 岩崎卓也「古墳出現期の一考察」『中部高地の考古学Ⅲ』長野県考古学会　1984年、ただしここでは「東海地方西部」を「濃尾平野」に置き換えて用いている。

(4) 1994年度の門間沼遺跡の調査概要は、石黒立人・栗林典昭・秋田幸純「門間沼遺跡」『年報　平成6年度』㈶愛知県埋蔵文化財センター　1995年、を参照。

(5) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅹ』真陽社　1981年

(6) 安達厚三・木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌』第60巻第2号　1974年

(7) 寺沢薫「畿内古式土師器編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所編　奈良県教育委員会　1986年

(8) 赤塚次郎「S字甕覚書'85」『年報　昭和60年度』㈶愛知県埋蔵文化財センター　1985年

(9) 最終段階のS字甕D類と宇田型甕は共伴するとされる（赤塚次郎「松河戸様式の設定」『松河戸遺跡』㈶愛知県埋蔵文化財センター　1994年）が、S字甕と宇田型甕の関係については、今後の資料の増加をまち、後考に期したい。

(10) 浅野清春・安達厚三「西北出遺跡の土師器」『いちのみや考古』No.18　1971年、服部信博「岩倉城跡下層出土の古墳時代前半期の遺構と遺物」『年報　平成元年度』㈶愛知県埋蔵文化財センター　1990年

(11) 服部信博、前掲註(10)文献

(12) 加納俊介・浅野清春・北村和宏「愛知県岩倉市小森遺跡出土の土器」『古代』第86号　1988年

(13) 奈良国立文化財研究所、前掲註(5)文献

(14) ㈶愛知県埋蔵文化財センター『朝日遺跡Ⅴ』1994年

(11) この形態の二重口縁壺については柳ケ坪型壺との関連が指摘されている。宮腰健司「朝日遺跡出土の外来系土器について－2－」『年報　昭和62年度』㈶愛知県埋蔵文化財センター　1988年

(16) 瀬戸市教育委員会『上之山』1992年

(17) 可児市教育委員会『川合遺跡群』1994年

(18) ㈶愛知県埋蔵文化財センター『堀之内花ノ木遺跡』1994年

(19) 可児市教育委員会、前掲註(17)文献

(20) 各務原市教育委員会『八龍遺跡A地区発掘調査報告書』1991年

(21) S字甕や柳ケ坪型壺の移動がC類段階以降、「東日本より畿内に重点をおいた方向性を示すようになる」という指摘（原田幹「S字甕の拡散からみた東海系土器の動向」『庄内式土器研究Ⅴ』庄内式土器研究会　1994年）にも関係するものと思われる。

(22) 赤塚次郎「考察」『廻間遺跡』㈶愛知県埋蔵文化財センター　1990年

(23) 奈良県立橿原考古学研究所『矢部遺跡』奈良県教育委員会　1986年